

問 1: 空所補充 (25～27)

(1) 空所 25

• 正解: a. after all

• 解説: 直前で「大人は助けを求めることを恥ずかしく感じ、脆弱 (vulnerable) な気分になる」と述べている。空所の文はその具体例であり、「結局のところ (after all)、道を尋ねる瞬間というのは、自分が道に迷っていることを露呈してしまうからだ」という理由の補足として機能している。

• ※出典の原文では "for instance" (例えば) だが、選択肢の中では「だって～だから」「結局のところ」というニュアンスを持つ after all が論理的に最も近い。

(2) 空所 26

• 正解: b. less likely

• 解説: 文脈は「7～8歳の子どもは、『賢く見られたい子』が先生に助けを求める可能性をどう考えるか」という点。本文10ページ上部で、この年齢の子どもは評判を気にするため、賢く見られたいキャラクターは助けを求める可能性が「より低い (less likely)」と推測したとある。

(3) 空所 27

• 正解: c. in front of

• 解説: 子どもたちは、仲間の「前で (in front of)」失敗を認めたり成功を控えめに言ったりすることが、自分を賢くないように見せてしまう行動だと認識している、という文脈。

問 2: 内容一致 (28～30)

(1) 空所 28

• 正解: d. not strong

• 解説: 本文1ページ目に「助けを求めることは人を vulnerable (脆弱、ひ弱) に感じさせる」「自分の incompetence (無能さ) を放送しているように感じる」とある。これに合致するのは not strong (強くない＝ひ弱な) である。

(2) 空所 29

• 正解: d. show kids' way of thinking

• 解説: 9ページ下部に、研究者が物語を作った目的は "to allow kids to showcase their thinking" (子どもたちが自分の考えを提示できるようにするため) とある。これに一致するのは d。

(3) 空所 30

• 正解: c. shows lack of ability

- 解説: 9ページ中ほどに、7歳の子どもは助けを求めることを "looking incompetent" (無能に見えること) と結びつけ始めるとある。lack of ability (能力の欠如) は incompetent の言い換えである。

問 3: 下線部(ア)の意味 (31)

- 正解: d

- 解説: 下線部(ア) "for the same reason" (同じ理由で) は、第1パラグラフで述べられた「大人が助けを求めるのをためらう理由」を指す。それは「自分の弱さや無能さをさらけ出すように感じて恥ずかしいから」である。選択肢 d の「自らのひ弱さと無能さを示しているように感じる」が正解。

問 4: 看護学部志願者用 (32～33)

(イ) "when it comes to education"

- 正解: d. with regard to education

- 解説: "when it comes to ~" は「～のこととなると」「～に関しては」という熟語。同じ意味を持つのは with regard to (～に関して) である。

(ウ) "Given our findings"

- 正解: d. when we consider our findings

- 解説: 文頭の "Given ~" は「～を考慮すると」「～を前提とすると」という意味の分詞構文的な表現。when we consider (私たちの発見を考慮すると) が最も近い。

問 5: 内容一致組み合わせ (34)

1. ×: 9歳まで評判を気にしないと思われていたが、新しい研究で「5歳から」気にすることが判明したとある。

2. ×: 子どもは洗練された推論をするが、心の中で起きていることを「常に説明できるわけではない (can't always explain)」とある。

3. ○: 研究では「本当に賢くなりたい子」と「賢く見せたいだけ (ふりをする) の子」の2人のキャラクターを用意した。

4. ×: 評判を気にしているときでも「オープンに助けを求められる」のではなく、むしろ「助けを求めるのを避ける」傾向があると述べられている。

5. ○: 最後の文で、他人の目を気にしていると、一生懸命働いたり困難な課題に挑戦したりすることが難しくなる (impede academic progress) と述べられている。

- 正解: b (3と5の組み合わせ)

子どもたちが助けを求めるのを恐れる理由

大人は助けを求めることに恥ずかしさを感じる人が多い。それは人を脆弱(弱々しい状態)に感じさせる行為だ。道を尋ねた瞬間、(1: 結局のところ)、自分が道に迷っていることを露呈してしまう。誰かの援助を求めることは、自分の無能さを周囲に発信しているような気分させることがある。

新しい研究によると、幼い子どもたちも、必要であっても学校で助けを求めないことがあるが、それは** (ア) 同じ理由からである**。比較的最近まで、心理学者たちは、子どもが自分の評判や周囲の視線を気にし始めるのは9歳頃からだと考えていた。しかし、ここ数年の相次ぐ発見がその前提を覆した。この研究により、5歳という若さの子どもでも、他人が自分をどう思うかについて深く考えていることが明らかになった。実際、子どもたちは賢く見せるために、単純なゲームでズルをすることさえある。

私たちの研究が示唆するのは、早ければ7歳で、子どもたちが「人前で助けを求めること」と「無能に見えること」を結びつけ始めるということだ。評判への懸念は、特に** (イ) 教育のこととなると**、重大な結果を招く可能性がある。どの子供も、いつかは教室で困難に直面する。もしクラスメートが見ている前で助けを求めることを恐れれば、学習に支障が出るだろう。この知識を得た教師や保護者は、自らの指導方法を評価し、子どもたちがより安心して援助を求められるようにする方法を検討すべきである。

子どもたちが評判についてどのように考えているかをより詳しく知るために、私たちは発達心理学の古典的な手法を応用した。子どもたちの周囲の世界に対する推論は非常に洗練されているが、自分の心の中で何が起きているかを常に言葉で説明できるわけではない。そこで、私たちは単純な物語を創作し、子どもたちが自分の考えを提示できるように、それらのシナリオについて質問した。

いくつかの研究を通じて、4歳から9歳までの576人の子どもたちに、物語に登場する2人の子どもの行動を予想してもらった。登場人物の一人は心から賢くなりたいと思っており、もう一人は他人の目に賢く映りたいだけである。ある調査では、両方の子供がテストで悪い点数を取ったと子どもたちに伝えた。その上で、どちらのキャラクターが、クラスのみんなの前で先生に助けを求めるために手を挙げる可能性が高いかを尋ねた。

4歳児は、どちらの子が助けを求めるかについて、どちらか一方を選ぶ傾向に差はなかった。しかし、7歳や8歳になると、子どもたちは「賢く見られたいと思っている方の子供」は、援助を求める可能性が** (2: より低い) **と考えた。そして、子どもたちの予想はまさに性質として「評判に関わるもの」であった。つまり、彼らは登場人物が仲間の前でどのように振る舞うかを具体的に考えていたのである。彼らは、賢く見られたい子が(対面ではなくコンピュータ上など)個人的に援助を求められる状況なら想像できたが、人前では両方のキャラクターが同じように助けを求めるだろうとは考えなかった。

また、他のシナリオについても質問した。子どもたちは、失敗を認めたり、成功を控えめに** (3: 謙遜したり) **するなど、子どもを賢くないように見せてしまう可能性のある他のいくつかの行動も認識していることがわかった。したがって、子どもたちは、ある人の行動が他人の目にどれほど賢くない(「鋭くない」)ように映るかについて、鋭敏に気づいているのである。

(ウ) 我々の知見を考慮すると、子ども自身が壁にぶつかっているとき、評判を気にしていれば、彼らもまた助けを求めるのを避ける可能性がある。もしそうであれば、他人がいるときに助けを求

めることをためらうことは、学業の進歩を深刻に妨げる可能性がある。いかなる分野においても向上するためには、熱心に努力し、(たとえ失敗や苦勞につながるとしても)困難な課題に取り組み、質問しなければならない。自分の見え方を気にしているとき、これらの努力はすべて困難なものになり得るのである。